

〔新刊紹介〕

林芙美子著、野田敦子編

『ピッサンリ』

和田 崇

小説『放浪記』や『浮雲』の作者として一般的な認知度の高い林芙美子は、優れた詩人でもある。だが驚くことに、生前には『蒼馬を見たり』（一九二五年）と『面影』（一九三三年）の二冊しか詩集が刊行されていない。彼女はその後も詩作を重ね、『ピッサンリ』と云ふ可愛い詩集をつくらうと思つた」こともあつたが、当人の「気持ちこそまで至ら」ず、結局それは実現しなかつた。フランス語で「たんぽぽ」を意味するという本書のタイトルからは、芙美子が企図してかなわなかつた第三詩集を、作者の死後六十余年を経て刊行するという編者の意図がうかがえる。

ただし、本書は詩集というわけではない。本書に収録されているのは、九二篇の詩、三篇のエッセー、一二篇の初期童話で、すべて全集未収録作品で構成されている。

それでも、収録されたエッセーはいずれも芙美子の詩観に関するものであり、また、小川未明や宮沢賢治の例を出すまでもなく、詩作と童話は密接にリンクする。つまり、「全集未収録」という作家の業績の遺漏を補完する文献学上のタームが、芙美子の場合には詩へと帰結するのである。

本書について特筆すべきは、そのように全集からこぼれ落ちた詩の断片の集成が、林芙美子という作家の生涯を浮かび上がらせている点である。たとえば、本書に収録された随筆「私と詩」で、「淋しさから出発した」と詩作の動機が語られており、それと呼応するように初期の詩には「淋しさ」（孤独感）がにじみ出ている。尾道時代の投稿詩「野菊」では、広い荒野に咲く野菊へ仮託し、自己を「淋しい花」と称する。また、上京後の生活から生まれた「あ

さ」や「寝覚」では、失恋と貧困、そこへ秋冷が重なり「地の底に沈む様なさびしさ」を感じるのである。

さらに、編者の野田氏が「生活を捉えた詩的スケッチの文章が『歌日記』に入り込み、そこから詩と散文が組み合わさった『放浪記』へと成って行つた」と『解説』で述べているように、芙美子の詩を『放浪記』のブレテキストやバラテキストとして読むこともできる。実際、収録詩のうち「裸の唇」は『放浪記』に織り込まれており、「放浪の唄」は浅草カジノ・フォーリーで同作が上演された際の主題歌であつた。最近、廣畑研二氏がテキストクリティックの観点から『放浪記（復元版）』を刊行したが、本書により、同作の生成論にも新たな地平が開かれることになるだろう。（思潮社、二〇一三年七月、三〇九頁、定価二六〇〇円＋税）

（わだ・たかし 本学及び武庫川女子大学非常勤講師）